

# 漱石の小説における比喩表現の特色

——詩的技法との関連を通して——

楊 麗 雅

## 目 次

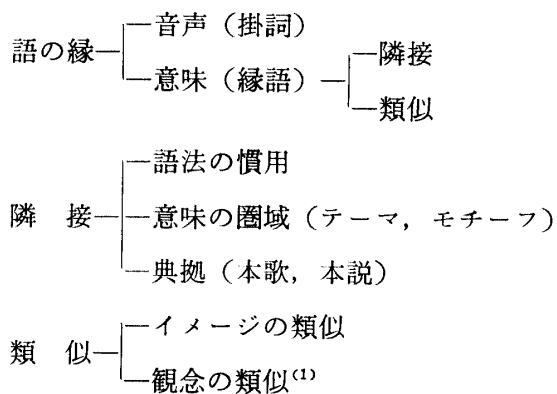
- 1. 序 言
- 2. 縁 語
- 3. 掛 詞
- 4. 季 語
- 5. 結 語

## 1. 序 言

夏目漱石は小説家として出発する前に、すでに俳人としてその名を知られていた。漱石は漢詩、俳句、英詩などの、詩の創作によって磨かれた言語感覚と詩的技法を、その散文表現の中に縦横に活かしている。本論では、漱石がいかに縁語、掛詞及び季語を、その小説における比喩表現に取り入れているのかについて分析する。

## 2. 縁 語

尼ヶ崎彬氏は語の「縁」の諸相を次のように示している。



漱石の縁語を盛り込んだ比喩表現には「観念の類似」に基づくものが多い。まず、その俳句<sup>(2)</sup>から一例を見よう。

人に言へぬ願の糸の亂れかな (p. 589)

「亂れ」によって、「糸」のイメージを引出し、「願」へとつなぐ。「願」という抽象的観念は、縁語によって物体化されている。

このような、抽象的観念を形象化する縁語の働きは、漱石の小説における比喻表現にも活かされている。

- 1 是から逢ふ人間には超然と遠き上から見物する氣で、人情の電氣が無暗に双方で起らない様にする。 (『草枕』 p. 396)
- 2 ……利害の旋風に捲き込まれて、うつくしき事にも、結構なことにも、目は眩んで仕舞ふ。 (『草枕』 p. 392)
- 3 ……冗談の雲は此時暫く晴れて、下から真面目が浮き上がつて来る。 (『虞美人草』 p. 83)
- 4 お延の心に羨望の漣漪が立つた。 (『明暗』 p. 174)
- 5 お秀の口から迸るやうに出た不審の一句、それも疑惑の星となつて、彼女の頭の中に鈍い瞬きを見せた。 (『明暗』 p. 370)

各句の縁語関係をまとめて示すと次のようになる。

1	人情	電氣		2	利害	旋風
	起る				捲き込む	目が眩む
3	冗談	雲	真面目	(青空)		
	晴れる		浮き上がる			
4	羨望	漣漪				
	立つ					
5			疑惑	星		
			瞬きをする			

例1では、「電氣」というイメージを導入することによって、本体<sup>(3)</sup>である人情を誇張し、そこから滑稽の情緒をもたらす。これは人間を「超然と遠き上から見物する」という画工の余裕を反映する表現である。

例2では、「旋風に巻き込まれる」と「利害」との結びつきは既に新鮮さを失ったものとなっ

ているが、漱石は「目が眩む」という表現を入れることによって、その新鮮さを取り戻している。

例3は、『虞美人草』に頻繁に用いられる美を本位とする比喩表現である。ここで喩体は単に本体を説明するだけでなく、その一連の縁語の結びつきによって、喩体は、雲が晴れて、青空が浮き上がってくるという自然の風景を同時に呈示する。この種の表現は、人事を自然風景で点綴することから生ずる美的情緒と、人事の風景と自然の風景との両者の落差から生じる滑稽的情緒とを合わせもつ。

例4の、「心に羨望の漣漪が立つた」は、「漣漪が立つように、羨望の念は心に起った」という直喩に言い換えることができるが、縁語式の構文による隠喩はこの直喩より、お延の緊迫とした心の動きを反映するのに、より効果的である。

例5では、星という語から「瞬き」という縁語を引き出す。「疑惑」は「星」を媒介に「瞬き」とつながる。このような解説をたどる前、まず、疑惑と星との結びつきの奇抜さに驚きの情を覚えるであろう。さらに、「星が空で瞬く」と、「疑惑の念が頭の中で閃く」という両者の相似点を見出したときの快感をえることになるのであろう。

以上で示した縁語的比喩表現は人事的材料に自然の材料を配置することを特色とする。このような表現は人事を詩化し、美的情緒をもたらす作用をもつものである。

初期の、『虞美人草』のような技巧に技巧を重ねた文章は、『三四郎』から影が薄れ、次第に平易な表現へと進んだが、例4と例5のような縁語の技巧を盛り込んだ比喩表現をみてもわかるように、漱石は、縁語の技巧を最後までその比喩表現に好んで用いたのである。

### 3. 掛 詞

掛詞は、本体に、それと完全に異質であるイメージを配置することにおいては、縁語と同様である。だが、イメージの導入によって、縁語では多くは視覚的な美の効果を狙うのに対し、掛詞は滑稽的情緒をもたらすことを主旨とするものが多い。まず俳句から一例を挙げよう。

手をやらぬ朝貌のびて哀なり (p. 583)

「朝貌」は朝起きた時の鏡に映った自己の顔と、植物の朝貌という二重の意味をもつ。髭を無造作にのばした様を、手入れされずに伸びた朝貌の草に喩えている。この表現は掛詞と縁語をもに活かしているため、視覚的美と滑稽的情緒を同時にもつものである。

漱石の小説では、このような掛詞を基調とする比喩表現が多くみられる。

1 話の種の思ふ坪に生えたるを，寒き息にて吹枯らすは口惜し。 (『菴露行』 p. 161)

2 余は木瓜の上へ顔を出す。

……

「……木瓜の中から出て居らっしゃい」余は唯々として木瓜の中から出て行く。

(『草枕』 pp. 532-3)

3 四人とも其寝足らない雲を膳の上に打ちひろげてわざと會話を陰気にしてゐるらしかつた。 (『行人』 p. 455)

例1は、二つの掛詞をはめ込んだ表現である。その一の「種」は話の種と、坪に生える植物の種という二重の意味をもつ。その二の「坪」は土地の意味と慣用句の「思ふ坪」の意味を同時に表わす。「生えたる」は「種」の縁語になっている。このような掛詞と縁語の巧みな結びつきによって、「話の種」という死んだ比喻が生き返ってくる。ランスロットの名前を聞いてさえ心が踊るギニギアにとっては、彼の消息に関する話は、表では無関心を装いながらも、心では何よりも知りたいことである。このようなギニギアの複雑な心の動きが、その短い比喻の中に煎じつめられているといえよう。

例2の「木瓜」は実景であるが、「木瓜」の発音から同音の語の「惚け」を引き出す。那美さんがもとの夫の野武士にお金を渡すこの場面を、一つの絵として見入っている画工の恍惚の状態を連想させる。木瓜は「花のうちで、愚かにして悟つたもの」とされており、画工の賞賛する「愚」や「拙」と関連するものである。

例3では、「陰氣」は自然現象の天気と人間の会話の雰囲気をつけている詞である。「陰氣」は同時に〈雲〉の縁語でもある。現実の風景には幻想的風景を重ね合わせることによってもたらされる美的情緒、また逆に、幻想的風景とそれを描く日常的語句との間の落差に起因する滑稽的情緒は、掛詞と縁語の組合せから生じるのである。

#### 4. 季 語

友岡子郷氏は俳句における季語の役割について次のように語っている。

俳句は、事ではない、ものであるという説は、俳句の本体を正しくつかんだ説だと思います。虚子が客観写生を唱えつづけた理由もそこにあります。季語は、写生的にもものをとらえる俳句の中心的なものであり、描き方によっては、象徴ともなる、含蓄ゆたかなことばなのです。季語は、季節のことばですから、普通、時間をあらわすことばと考えられていますが、ものをし

っかりと印象づけるゆたかなことばですので、そのうえ空間をもあらわすことばといえるのです。私は、時間と空間の一点に結ばれる場をあらわすことばだと考えています<sup>(4)</sup>。

(下線は筆者による)

友岡氏は、季語が象徴性及び「時間と空間」を同時に表す機能をもつことを指摘している。ここではこのような季語の特色が、漱石の比喩表現において、いかに機能しているのかについて論じていきたい。

- 1 骨の上に春滴るや粥の味 (p. 708)
- 2 時くれば燕もやがて歸るなり (p. 649)
- 3 堇程な小さき人に生まれたし (p. 602)
- 4 萩に置く露の重きに病む身かな (p. 714)

例1の季語は〈春〉である。自然界のすべての事物が長い冬から甦える季節であるという時候の連想及び、美しい新緑が一齐に目吹く光景などのような空間の連想は、この〈春〉の季語によって引き出される。春は生命の復活という象徴的な意味をもっていることから、大患のあと、自分よみがえってきた命のありがたさを心ゆくまで味わっている漱石の心情がその〈春〉の季語のなかに溢れ出ている。したがって季語は、俳句の焦点となる語であり、この短詩型に無限のひろがり余韻を吹き込むことばである。

例2は、送別の句である。中の「燕歸る」は、秋の季語である。同じ秋の季語として「去ぬ燕」「巢をさる燕」などもある。秋になって燕が一齐に南へ飛び去ってゆく情景を目にしたときの名残り惜しさをもとにした惜別の情を歌ったものである。そして、去ってゆく燕がやがてまた帰ってくることに託し、友の戻ってくることを願う心も、同時に句中に詠み込まれている。

俳句は実際の自然風物に触れ、そこから湧いた感興を句に収めたものが多い。俳句の季語は比喩表現として用いられる際にも、一つの実景としての意義を合わせもっている。例3の「堇」は春の季語であり、「小さき」の形容であるが、同時に一つの春の景を呈示し、句の中に春の情緒を持ち込ませたものである。

例4の「露」は「病む身」の軽さを形容していると同時に、「萩」とともに淋しい秋の風景をも呈示し、それが病む人の淋しい心象風景をも暗示するものとなる。すなわち、「露」のイメージは比喩的に用いられていると同時に、季語として象徴的にも機能している。

以上挙げた句が示しているように、漱石の俳句に於ける季語は象徴性と寓意性の濃いものである。言い換えれば、「寄物陳思」的色彩が強い。

次に、漱石の俳句における季語のこの特色は、いかにその小説の比喩表現に反映しているのかを見てみよう。漱石は人物描写において、よく季語の象徴性を生かしている。

立ち枯れの秋草が氣紛の時節を誤つて、暖かき陽炎のちらつくなかに甦えるのは情けない。

(『虞美人草』 p. 143)

「陽炎」は春の季語であり、この作品の季節に一致する。驕れる春の百花の王のような藤尾と対照的に、小夜子には可憐な秋草のイメージが托されている。春の花が咲き乱れるこの作品の季節の中に、小夜子は時節を誤って、春の中で一人淋しく立ち竦む秋草のような存在である。

華やかで、驕奢な女主人公はよく春のイメージと結びつけられるのに対し、静かで、淋しい感じのある女性は秋のイメージに結びつけられることが多い。例えば、『草枕』の那美さんには椿の花のイメージが托され、『虞美人草』の藤尾は春の女王のように描かれている。これに対し、『虞美人草』の小夜子、『門』の御米、『行人』のお直に関しては、秋のイメージが用いられている。

『吾輩は猫である』の青年詩人である越智東風は自分の名前を「おちとうふう」ではなく、「おちこち」と読むと強調している。「おちこち」はここかしこという意味があることから、実方清氏は越智東風が「風のまにまにあちこちと動かされるような存在である」<sup>(6)</sup>と解釈している。東風は季語としては「とうふう」と読まずに「こち」と読む。したがって、東風を「こち」と読むようにとりわけ強調しているのは、季語としての「東風」の意味をにおわせたかったからと考えられる。春の季節と、この美と愛を求める青年詩人のイメージとが見事に相俟って一幅の青春図を構成している。西洋美学者の迷亭は「池に浮いている金魚麩のようにふわ（ふわ）してゐる」<sup>(6)</sup>と形容されている。「金魚麩」は「金魚」のイメージを掛けている。「金魚」は夏の季語である。人工の美を極めた金魚は西洋美学の歪みを暗示しようとしているのであろう。一方、東洋哲学者である獨仙は「自然薯」という秋の季語で喩えられている。東洋的な消極主義や悟道を唱える獨仙と、静かな秋の雰囲気とが、一脈通じているように思われる。主人公の苦沙彌を描写する比喩表現は、ほとんど冬のイメージで描かれている。例えば、苦沙彌の目を「北国の冬空のやうに曇つてゐた」と描写したり、彼のあくびを「鯨の遠吠えの様に頗る變調を極めたものであつた」と形容したり、彼の性格を「牡蠣」をもって喩えたりしている。「冬空」、「鯨」、「牡蠣」はいずれも冬の季語である。苦沙彌の偏屈な性格及び、孤独な心象風景はその荒涼たる冬の風景と映し合うのである。

以上、季語の象徴性がいかに漱石文学の人物描写に活かされているのかについて見てきた。

更に小説の比喩表現にはめ込まれた季語の時空と小説の時空<sup>(7)</sup>との関連について分析したい。

- 1 女の聲は静かなる春風をひやりと斬つた。詩の國に遊んでゐた男は、急に足を外して下界に落ちた。  
(『虞美人草』 p. 30)

- 2 時ならぬ春の稲妻は、女を出で、男の胸をすりと透した。色は紫である。  
(『虞美人草』 p. 33)
- 3 其時代助の脳の活動は、夕闇を驚ろかす蝙蝠の様な幻像をちらり(ちらり)と産み出すに過ぎなかつた。  
(『それから』 p. 515)
- 4 宗助は此宣告を淋しい秋の光の様に感じた。  
(『門』 p. 687)
- 5 今夜聞いた叔父の言葉が、月の面を過ぎる浮雲のやうに、時々薄い陰を投げた。  
(『明暗』 p. 97)

例1の「春風」は二重の意味をもつ。その一つは現実に吹いている春風である。一方、春風は駉蕩たる穏やかな風であることから、いままで、小野さんが逍遙していた「詩の国」の穏やかな雰囲気をも暗示している。したがって、「春風をひやりと斬つた」という表現は、藤尾の発した鋭い一句が、小野さんのそのような美しい幻想を引き割いたことをも意味することになる。

『虞美人草』の季節は春と設定されている。例2の「時ならぬ春の稲妻」という表現は、明らかに「稲妻」が秋の季語であるということ意識しているものである。

例3の「蝙蝠」は夏の季語である。蝙蝠は夏の宵の風物としてよく俳句の中に詠み込まれる。『それから』の季節の大半は夏と設定されている。「夕闇を驚ろかす蝙蝠」のイメージは、代助が寐ながら脳の中に「ちらり(ちらり)」と生じた幻想の喩えであると同時に、夏の夜の風景や雰囲気をも呈示するものである。

例4の「淋しい秋の光」は、主人公の淋しい心象風景を描くために持ち込まれたイメージである。同時に、作品の実際に流れている秋の風景をも示す。

『明暗』の季節は秋である。例5の「月」は秋の季語である。津田が夕食後、叔父と話をしている場所は室内である。この比喩によって、家の外に浮雲が月の面を通り過ぎてゆくという、美しい秋の夜の風景も映し出されている。

比喩表現はおもに二つの点において作品の時空と関連をもつ。第一は、その比喩表現に用いるイメージが作品の現に流れている時間、または呈示している空間と調和し、あるいはそれらをふまえていることである。第二は、作品の実際の時空の上に、さらに虚構の時空をつくりあげることである。

作品内の時空と結びつくことによって、比喩表現は単にある観念を喩えるだけでなく、それ自体が一つの季節風景を呈示し、作品の実際に流れている風景の中に溶けこむことになる。

## 5. 結 語

正岡子規は漱石の俳句の特色について、「その意匠極めて斬新たる者、奇想天外より來りし者多し」と述べ、「漱石また滑稽思想を有す」と評し、その句法の特色としては「或は俗語を用い、或は奇なる言ひまはしを為す」<sup>(8)</sup>ということを挙げている。

正岡子規の挙げた漱石の俳句の特色は、漱石の小説における比喩表現のもつ特色でもある。本論での分析が示してきたように、漱石の比喩表現は滑稽的情緒をもつものが多い。これは比喩表現に「掛詞」の技法を活かしたことに負うところが大きい。

漱石の比喩表現のもう一つの特色は豊かなイメージを呈示することである。そのイメージの多くは自然景物であり、季語のような機能をもつ。すなわち喩体に使われる自然景物のイメージは、作品の時空を呈示する働きをもつ。この種の、人事に自然景物を配置する季語的な比喩表現は美的情緒を醸し出すのである。漱石は俳句の創作で磨いた豊かな季節感覚を、その小説の表現に活かし、言葉の背後に潜む季節の風景と象徴性とを丹念に描き出している。

### 【注】

- (1) 尼ヶ崎彬『日本のレトリック』四「対句」95頁（筑摩書房 1988年1月）。
- (2) 漱石の文学作品からの引用はすべて岩波書店昭和四十二年刊行の『漱石全集』による。俳句はその第十二巻。
- (3) 「本体」と「喩体」は比喩表現を分析する際に用いる用語である。「本体」はたとえられるもの或いはことを、「喩体」はたとえるもの、或いはことを意味する。
- (4) 友岡子郷『俳句創作の世界』第二章 4 「季語について」68頁（有斐閣 昭和56年）。
- (5) 実方 清「漱石文芸の世界」第一節（『実方清作品集』第八巻 53頁 桜楓社 1986年）。
- (6) ( ) のなかは原文では送り字で記されている。本論ではすべて現代風書き改めている。
- (7) 漱石小説における季節は次のようになっている。

春：『琴のそら音』、『草枕』、『虞美人草』

夏：『一夜』、『薤露行』

秋：『二百十日』、『野分』、『明暗』

冬：『趣味の遺傳』

このほか、『三四郎』は秋を、『それから』は夏を、『門』は秋と冬を主な季節とする作品である。漱石の初期の小説の多くは、一つの季節を作品の背景とするものである。一方、『三四郎』から、『道草』までの作品には、ほとんどいくつかの季節が作品の中を流れている。最後の『明暗』は秋の季節のままで未完になっているが、今までの傾向からみると、季節の移り変わりがこの作品の中でも起こってくる可能性が十分ある。

俳句はある季節を明確に句中に読み込む。このような季節の特色については、初期の小説は俳句からの影響が大きい。

- (8) 正岡子規「明治二十九年の俳句界」『日本』明治30.3.7 二十一（本論での引用は『子規全集』第四巻による。558頁—559頁 講談社 昭和50年）。